

いしかわ地域づくり円陣2018

「共感と交流 ～学ぼう、遊ぼう、つながろう～」開催報告

会場：公立小松大学中央キャンパス3階
時間：13:30～16:40

1. プログラム

< 1 限目：全校集会 > 13:30～14:00 (305・306講義室)

■開会挨拶

石川地域づくり協会 副会長 岡山 敏弘

■石川地域づくり表彰

(主催：石川県、後援：石川県市長会、石川県町長会、石川地域づくり協会)

○表彰状授与式

○審査講評

○受賞団体・個人からの発表

■オリエンテーション

< 2・3 限目：地域づくり団体による分科会 >

	301 講義室	302 講義室	303 講義室
<2限目> 14:05 < 15:05	■理科 「いいだしっぺの力学」 <担当団体> 北國とおり町にぎわい協議会(小松市)	■社会 「口も汗も金も出す景観まちづくり」 <担当団体> NPO法人歴町センター 大聖寺(加賀市)	■国語 「伝える」と「伝わる」 <担当団体> しまんと新聞ばっぐ金沢支部(金沢市)
<3限目> 15:20 < 16:20	■算数 「「お金をください」と言える力をつける」 <担当団体> ピースバンクいしかわ(野々市市)	■理科 「里山の資源を活用し地域を豊かに」 <担当団体> ・里山自然学校こまつ 滝ヶ原(小松市) ・花咲く湯涌・まちづくりネットワーク推進プロジェクト(金沢市)	■国語・音楽 「先人の心を後世に残すには」 <担当団体> 一般社団法人語り部協会(能美市)

< 4 限目：全校集会 > 16:35～16:40 (学生交流ホール)

■閉会挨拶

石川地域づくり協会 運営委員長 谷口 健一

< 交流会 > 16:50～18:00 (カブッキーランド「カルチャールーム」)

2. 開催内容詳細

(1) 石川地域づくり表彰 表彰式＜1 限目＞

【石川地域づくり表彰授与】

以下の団体・個人に石川地域づくり表彰の授与を行った。

○団体部門・大賞：能登島地域づくり協議会（七尾市）

住民や公民館、町会、観光協会などの幅広い関係者が連携し、小規模多機能自治組織として他のモデルとなりうる活動を行っており、イベント等で島民の絆づくりに取り組むとともに、交流人口拡大や生業創出に向け、耕作放棄地を利用した酒米栽培による日本酒開発や、滞在メニューや加工品の開発など様々な取組を展開。

○団体部門・優秀賞：合同会社のとしし団（羽咋市）

羽咋市と連携しイノシシ肉の加工・販売に取り組み、順調に売り上げを拡大させるとともに、これまで廃棄されてきた皮を活用し財布等の製品開発にも取り組むなど、獣害対策で捕獲したイノシシの地域資源化・利用拡大を推進。

○団体部門・奨励賞：鳥越ワカモノの会（白山市）

鳥越地区の若者が自主的に集い、地元のイベントに積極的に参画するとともに、イノシシ肉や鳥越のそばなどを活用した地産地消メニューを考案しイベントで提供するなど、過疎が進む地域の活性化に貢献。

○個人部門：岩本 歩弓氏（金沢市）

自らの手で築き上げた工芸作家や個人商店などの豊富なネットワークを活用し、県内外での「乙女の金沢展」や「乙女の金沢 春ららら市」といった、地元の人が良いと思っている金沢や石川の工芸品や食などを発信するイベントを定着させるなど、金沢や石川の魅力発信に自主的に取り組んでいる。

【審査講評】

谷本 亙 石川地域づくり表彰審査委員会座長

【受賞団体・個人活動紹介】

①能登島地域づくり協議会（七尾市）

②岩本 歩弓氏（金沢市）



（２）地域づくり団体による分科会 ＜２限目＞

■理科「いいだしっぺの力学」【301講義室】

（発表団体：北國とおり町にぎわい協議会（小松市））

【発表者】

中出暁史さん 金田奈津代さん

【担当コーディネーター】

安嶋是晴

【サポート役】

藤橋由希子

【参加者数】

29名

【進行の概要】

趣旨説明&アイスブレイク（5分）

活動紹介（30分）

問題意識に基づく質疑応答（15分）

振り返り&まとめ（5分）



【団体発表の概要】

活動エリアである西町・龍助町はかつて金融、病院、企業（商店）が建ち並び小松市をけん引する経済地区だった。

このエリアを通る道路が県の整備事業の対象となることをきっかけに、活動を開始。

まちづくり部会（まちづくり全般、協定作りなど担当）・みちづくり部会（道路舗装、無電柱化等のハード面担当）・にぎわい部会（にぎわいづくり活動の実施主体）の3つの部会で構成されている。

今回の発表者はにぎわい部会のリーダー。

にぎわい部会の活動は以下の①～④

①瓦版、ロゴ、HP、キャッチコピーの作成

②HP、SNSによる情報発信

③ミニチュア曳山の展示

④北國とおり町マーケットの開催

→④の活動に対して掘り下げ

コンセプト：サーカスのようなワクワク感の創出

知名度の高いどんどん祭りと連携して同日程で開催

（効果と気づき）

- ・どんどん祭り側（行政）からこれまでにない客層の来場があったと相乗効果を評価
- ・イベント開催には町民の協力が大切（住民には曳山祭りによる「お祭り魂」がある）

【意見交換（質疑応答）の内容】

Q. 活動を始めたきっかけは？

A. 地域の重鎮からの依頼を受けて、はじめは一人から始めたが、もともこの地域には商店主が多く、地域を盛り上げる＝店を盛り上げることに関心が高かったため、協力者が増えていった。

Q. なぜ中出さんを応援するのか？

A. 中出さんは…熱い人、町を誇りに思っている、町を大切にしている気持ちが伝わる、明るく素直

な性格、褒め上手、悪口言わない、行動派、意思決定が速い、感動しやすい、広告塔的存在、一言でみんなが動く（リーダーシップがある） →魅力的で皆から好かれている人

Q. 活動参加のメリットは？

A. とおり町マーケットには地域外から5名のボランティア参加があったが、彼らにはモノではなく「心の満足」を与えられたと思っている。

地域住民からも、曳山祭りの他に祭りができると喜んでくれた。

→リターンに何が得られるかをデザインすることがリーダーに求められる。

【まとめの概要】

いいだしっぺ（リーダー）に必要な能力とは？

- ・他人事でなく自分事で考えることができる。
- ・新しいアイデアを持っている（知恵がある）。
- ・受容する地域がある。

↓

リーダーは待っていても現れない。

必要と思うなら自分が立ち上がってほしい。

必要な条件は今回の講義の中にヒントがある。

【その他参加者（小松市民）の声】

①地域のお宝（各家々に眠っているもの）をもっと見やすくしてはどうか？

→曳山を展示したように、今後は地域の町屋を公開して、その中でワークショップを行うなど計画中

②近くに住んでいるのにこんな取り組みを全く知らなかった。その熱を是非周辺地域にも広めて欲しい

→自分たちはまだ動き始めたばかり。みんな働きながらやっているのと、活動資金は補助金などに頼らず自分達で賄える事（＝持続可能）が自分達のペースなので、理解して欲しい。

■社会「口も汗も金も出す 景観まちづくり」【302講義室】
(発表団体：NPO法人歴町センター大聖寺（加賀市）)

【発表者】

篠原隆一さん

【担当コーディネーター】

埦正浩

【サポート役】

福島誠一、大西直之

【参加者数】

21名

【進行の概要】

14:15 趣旨並びに進行の説明

14:20 歴町センター大聖寺の歴史、活動の発表

14:50 コーディネーターからの質問、参加者との意見交換

15:05 まとめ

15:10 終了



【団体発表の概要】

歴町センター大聖寺の活動として、「大聖寺まちなみ景観整備委員会」の発足から、具体的な活動について説明がありました。

○ハード面の整備

一里塚の設置、時習庵の整備、時鐘堂の再建、街並み景観広場、もてなしトイレ案内処など。

○ソフト面の整備

第27回全国町並みゼミ大聖寺大会の開催、ええもん市の開設、ふるさと風景まもり隊など。

まちづくりにあたり、住民が町並み調査や、景観基準の作成と住民への説明・説得などを行った。

ポイントとしては

- ・自分たちが楽しむことからスタート
- ・女性や子供たちと一緒に活動することにより周りを巻き込む
- ・行政職員も市民としてサポートする
- ・自分たちの町は自分たちが守り、育てる
- ・当初はバッシングも受けた

1. 活動に対する志やビジョン

町が壊れる⇒歴史的景観の保存

⇒地域活性は住民自身の活性化、地域で共に楽しく活動したい!!!

2. 活動への人の巻き込み方

女性や子供たちが活動に参画

3. 活動継続の秘訣

みんなでワイワイ楽しく活動

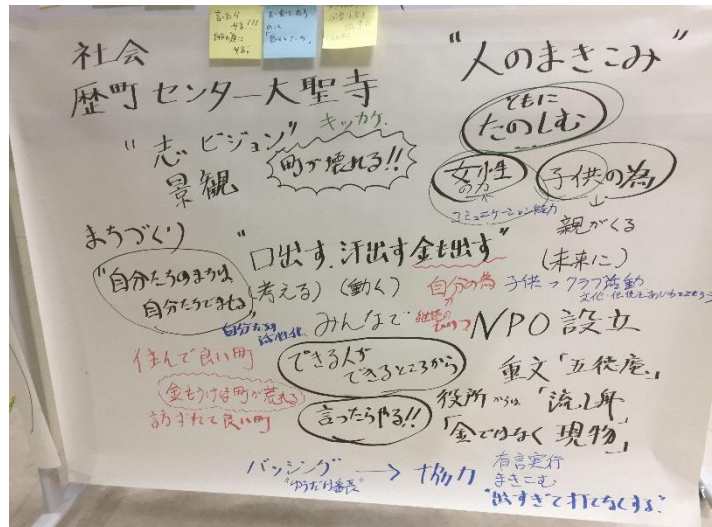
頭＝知恵出す、体＝汗かく、財＝金出す ⇒みんなで口出す
できる人ができる所から始める

「ヤッパ 大聖寺が好きや！」



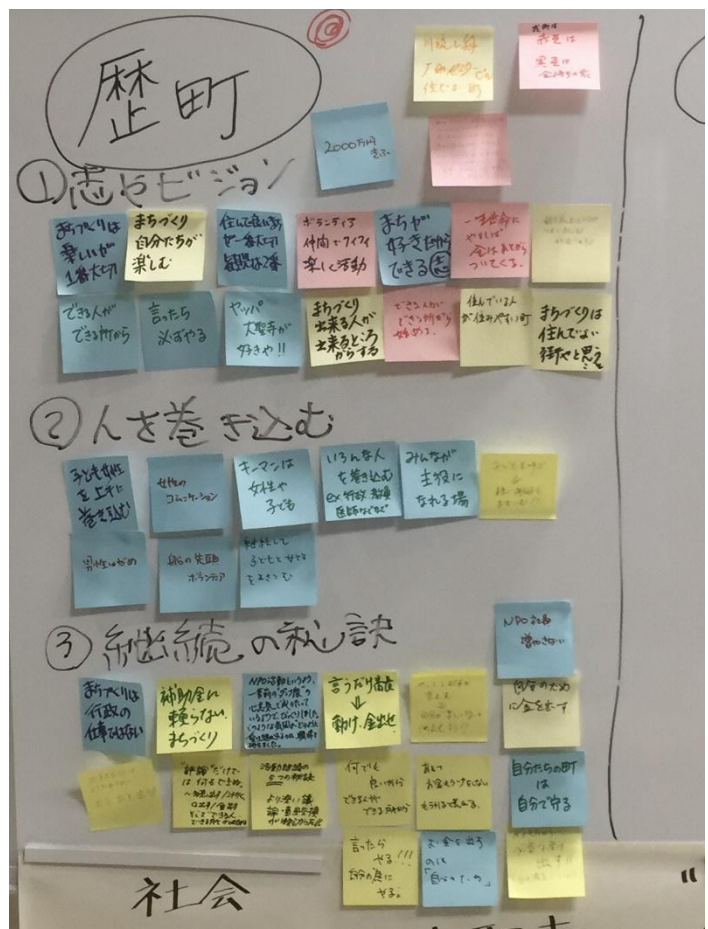
【意見交換の概要】

- きっかけは「町が壊れる」
住んで良い町・訪れて良い町
金儲けは町が荒れる。
有言実行
- 継続の秘訣は？
自分の為
言ったらやる！
- 出る杭は打たれる
バッシングは言うだけ番長を
協力者に巻き込む
出すぎて打てなくする
- 金出すはいくらまで？
人のために提供するのではなく自分の為である
行政は金ではなく現物



【まとめの概要】

- 志やビジョン
ヤッパ 大聖寺が好きや！
自分たちの町は自分たちで守るという意識
- 人を巻き込む
キーマンは女性や子どもたち
共に楽しむ
- 継続の秘訣
できる人ができる所から取り組む



■国語「伝える」と「伝わる」【303講義室】

（発表団体：しまんと新聞ばっぐ金沢支部（金沢市））

【発表者】

木津裕美さん、木村明子さん

【担当コーディネーター】

赤須治郎

【サポート役】

川北重信、大地美子

【参加者数】

10名

【進行の概要】

14:10～14:20 オリエンテーション
アイスブレイク

14:20～14:30 活動報告

14:30～14:50 意見交換

14:50～15:00 まとめ

15:00～15:10 新聞ばっぐについて質疑応答、PR



15:10～16:30 学生ホールにて新聞ばっぐワークショップ

【団体発表の概要】

高知県の地域づくり活動のひとつ、「しまんと新聞ばっぐ」の活動に共感した石川県在住の女性たちが、インストラクターの資格を取り、「しまんと新聞ばっぐ」の金沢での普及啓蒙活動を行っている。

分科会では、自分たちの活動を伝える（広める）ための意見交換を目的に参加した。

【詳細】

オリエンテーションでは進行役の赤須氏より、本日のテーマ「伝える、伝わる」と、本日のルール「聞く、意見をしない、違いを認める、問いかける」の4項目が示され、アイスブレイクに入った。

アイスブレイクでは6名ずつ2列で向き合い、自己紹介と何を聞きたくて参加したかを互いに伝え合った。さらに次々と相手を変えてゆく手法で、全員が互いの名前と参加目的を共有した。

活動発表では「しまんと新聞ばっぐ」の成り立ちから目的、活動などが紹介され、金沢支部が寺院や金沢大学などに行ったワークショップなども紹介された。

「しまんと新聞ばっぐ」の成り立ちは、高知県・四万十川の中山間地で活動する特定非営利活動法人RIVERの代表の“特産品を新聞紙で包もう”という提案から始まったもので、廃棄される新聞紙を使ったパッケージはエコ活動の側面も持ち、収益の一部は四万十川的环境保全に使われている。

「しまんと新聞ばっぐ」の活動を広げるためのインストラクター養成プログラムを実施しており、現在全国で500名を超えるインストラクターが承認されている。金沢支部のメンバーもインストラクターの資格を取得し、活動している。金沢らしさを出すためにお寺や大学図書館などを主な活動の場として選び、「oterart（オテラート）金澤 2018」にも参加して活動の幅を広げている。

【意見交換】

意見交換では、参加者に発表者の2名を加えた12名を6名ずつの2チームに分け、協会サポートスタッフが進行役となり、本日のテーマ「伝える、伝わる」についての意見交換を行った。

大地が担当したチームでは、まず「しまんと新聞ばっぐ」の活動について個々の感想を聞き、今後の展開についての意見交換に入る予定であったが、個々の感想とそれに対する発表者からの回答に終始し、今後の展開についての意見交換まで到達することができなかった。

「新聞ばっぐ」のデザイン性や新規性に注目される中、「この何でもある時代に何故わざわざ新聞で作ったばっぐを持つのかわからない」といった意見もあり、地域活動の持つ意味や価値感を伝えることの難しさを知ることとなった。

古紙として廃棄される新聞紙を、地域住民の知恵で付加価値の高い「新聞ばっぐ」に再生し、事業化していることに参加者の多くが賛同し、価格や強度、デザイン性などに意見や質問が交わされた。

「伝える」ために、新聞という多くの情報を掲載する媒体を選択したことや古紙再生に込められたモットーの気持ちが、今後の「新聞ばっぐ」活動の普及を後押しする力となることが参加者の共通認識として確認された。

【発表】

意見交換後の発表ではほかに、

- ・新聞に着目してメッセージを込める手法は面白い。
- ・送り手のメッセージを伝えるための差別化されたアイテムとして価値がある。
- ・環境づくりのほかに、活動を展開できる可能性を感じる。

等が挙げられた。

【まとめ】

「しまんと新聞ばっぐ」の活動や成果は素晴らしいもので、地域活動に込められた思いが人々に共感されることで、全国に普及している。そこには、エコ活動への参加やデザイン性、手軽さ、収益性などが含まれており、ひとつのビジネスモデルとして成立している。

これを他地域でそのまま当てはめることは難しいが、「しまんと新聞ばっぐ」の活動に対する共感をバネに金沢支部は運営されている。

四万十で生まれた活動を、どうやって金沢で展開してゆくかは大きな課題だ。全国で500人を超えるインストラクターがいても、実際に活動をしているのは一握りという実情を聞いてもその難しさは容易に想像できる。

金沢支部では、作品（新聞ばっぐ）の展示とワークショップの開催で賛同の輪を広げようとしている。日本最後の清流といわれる四万十川の流域で生まれたエコ活動を、城下町の遺産が多く残る金沢の地で根付かせるには一工夫が必要だ。

それが可能かもしれないと感じさせる力が「新聞ばっぐ」にはある。今回の分科会の参加者は皆、その可能性を感じて参加してきている。

他地域から生まれた新しい地域づくりの仕組みを、当地に移植して発展させるためにどのようなスキームが必要か。「伝える、伝わる」ためには何が必要か、大きな宿題をもらった分科会であった。

分科会の最後に「しまんと新聞ばっぐ金沢支部への応援メッセージ」「しまんと新聞ばっぐ金沢支部への質問」「本日の気づき」「分科会運営への苦言」をポストイットに書いてもらいました。そのコメントを紹介します。

1. しまんと新聞ばっぐ金沢支部への応援メッセージ（評価）

- 良い取り組み。長く続けて欲しい。
- 興味あります。ぜひ詳しく知りたいです。がんばって広めてください。
- 関心と話題の対話が生まれるのでいいネ気持ちです（留学生のコメント）
- 自分も使ってみたい。（留学生のコメント）
- 子供たちへ伝えて未来へ（留学生のコメント）
- 広く宣伝してほしい（留学生のコメント）
- 今後の活動をより深めて欲しい
- うちの娘が工芸好きで、ぜひ娘に作り方を教えてあげたいです。
- とても素敵な取り組みです。今後の展開に期待します。取り組みに関するPRも更にされると興味を持つ人が増えると思います。
- 環境にやさしい活動として継続していただきたいのと同時に新しい価値を生み出す活動ができるといいと思います。少ない人数で活動し、大きな活動になればいいと思います。
- 新聞紙をバッグにという発想が面白かった。環境というテーマで新聞をバッグへ、そしてそのバッグから情報やメッセージを発信していくことがとても素晴らしいと思った。ちょっとしたアクセサリーなんかもつくれそうだった。
- メッセージの伝えや環境に対する助けが非常に素晴らしいと思い、頑張ってください。
- 面白い取り組みだと思う。ユーザーは「他人」に見せたいという気持ちがあるので、そこをうまくくすぐってあげられる取り組み（仕組み）にできると良い。エコはエコで良いが、持ちたくなるバッグとは何か、を常に考えていけるとどんどん普及していくと思う。
- 非常に素晴らしいことをやっています。もし、社会問題の解決と利益問題が同時に解決できれば良いと思います。
- 本当に良い仲間と知り合えた様子でぜひこれからも良い関係をつづけてください。
- 人との出会いなど、活動ひとつひとつをととても楽しんでいる今の気持ちを大切にしてください。

2. しまんと新聞ばっぐ金沢支部への質問

- 子供、高齢者と活動はあるか？（留学生のコメント）
- 介護施設へ出向き取り組んで（留学生のコメント）
- これは全国どのくらいの数の支部があるのでしょうか？
- より大勢の方に使って頂く、何で使って欲しいのかのメッセージを伝えて欲しい。
- バッグ以外の展開について、なにか考えておられますか？
- さらなる活動の活性化のために必要なことは何でしょうか？お金だけではなく、智慧があれば教えていただけると幸いです。
- やる気、意欲がもっと他に？
- 若者の何でも変わったものを求めて？誰が使うの？

3. 本日の気づき

- 身近なものにも宝があることに気づかされました。

4. 分科会への苦言

- 少し時間が短いと思います。
- 時間が少ない。今回の内容ならば2時間くらいあるととても良かった。
- 発表は着席が良かったです。せっかく展示したのですが、より多くの方に見ていただけるよう、開かれた場所に展示すれば良かったと反省しました。私のグループ（班）はみなさん好意的で外国からの留学生を含めた色々な方にワークショップなどで広めたいとさらに思いました。（金沢支部木村さんのコメント）
- 地域コミュニケーションをより活性化しようと何かヒントを求めて参加したのに、何を求めているのか分らなかった。面白いからやってみよう、応援しようとしている？

5. コーディネーターとしての所感

- ①しまんと新聞ばっぐ金沢支部の活動への評価は高かった。
その理由はプレゼンテーションが良かったからである。
多くの質問を引き出した。
- ②テーマの「伝える、伝える」について考えを深めることはできなかった。
その原因はオリエンテーションの不徹底にある。
オリエンテーションで広報活動についての困り事などを聞き出しておくべきであった。
ただし、「～金沢支部」の活動発表に、それに対する直接的な回答を求めることはできない。構想倒れであったのかもしれない。

< 3 限目 >

■算数「「お金をください」と言える力をつける」【301講義室】

(発表団体：ピースバンクいしかわ(野々市市))

【発表者】

小浦むつみさん

【担当コーディネーター】

谷内博史

【サポート役】

村本睦戸、三津井司

【参加者数】

14名

【進行の概要】

- 15:25 趣旨説明
- 16:00 担当団体からの発表・問いかけ
- 16:25 問いかけに対する参加者との意見交換
- 16:35 まとめ
- 16:40 終了



【団体発表の概要】

- ・設立の経緯：フィリピンでの体験と自分の居場所探しとのはざままでフェアトレードに興味をもつ。
- ・フェアトレードのお店を開業しようと銀行に相談に行くが、当時は収支計画などの資料作成もままならずお金を借りる気が失せてしまったところ、東京の非営利バンクである「APバンク」の融資制度を知り申し込み、志に共感をしてもらい300万円調達することができた。
- ・借りてかえすお金のめぐり方を考えて、市民バンクを立ち上げ、出し手（出資者）と使い手（融資を受ける者）の間に立って、活かす立場を経験。
- ・クラウドファンディングをサポートなど、複数のプロジェクトを支援。

【意見交換の概要】

- ・事業：「なぜそのお金が必要なのか？」と問いかけると本質がわかる。自身が「なぜ」をわかっていると人に伝わらない。
- ・お金：適切に稼いで回収して返済する、を真面目に考えることで循環していける。
- ・まきこみ：設計図（Plan）に自信があるかどうか？人にいかに共感してもらうか？が大事なポイント。
- ・クラウドファンディングの失敗するポイントは恋愛と同じ。
- ・調達をことうった人：経験がないのに資料が立派なケース。
- ・お金の集め方：人はどういうときに助けてくれるか？を考える。

【まとめの概要】

- ・活動の在り方を信じて、わかるように心をこめて伝えること。
- ・「儲かる」とは「人を信ずる者」と書く。自分を信じ、自信を持って「お金の必要性」を言うことができるということ。
- ・事業を推進するにあたって、お金をください？と言えますか？

■理科「里山の資源を活用し地域を豊かに」【302講義室】

発表団体：里山自然学校こまつ滝ヶ原（小松市）

花咲く湯涌・まちづくりネットワーク推進プロジェクト（金沢市）

【発表者】

（里山自然学校こまつ滝ヶ原）

川畠平一さん（里山自然学校こまつ滝ヶ原学校長）

（花咲く湯涌・まちづくりネットワーク推進プロジェクト）

黒瀬博之さん（金沢市地域おこし協力隊）

【担当コーディネーター】

加茂谷慎治

【サポート役】

高名雅弘、川北重信

【参加者】

29名

【進行の概要】

15:20 開始

15:25 川畠学校長・黒瀬さん 団体発表

15:45 各テーブル 自己紹介

15:55 地域の資源を生かして活動を活発にするにはどうしたらよいか、グループ討議



【団体発表】

○里山自然学校こまつ滝ヶ原

何をするか、自然農法を入れて里山に展開し、木場潟等を保存し、学びの場にしたい。

①ともに里山里海を学び、汗を流す

②地域固有の水質保全等に学び取り組んでゆきたい。

③リーダーの発掘と老年・壮年・青年・幼年の連携を図る。

④行政との連携（管理費）

○花咲く湯涌・まちづくりネットワーク推進プロジェクト

・平成24年3月に湯涌校下の17団体から30人で発足。

現在は60名。少子化対策、農業振興や交流人口の増加に取り組む。

・平成28年に地域おこし協力隊を委嘱

これまでの取り組みを精査し7つの部会を編成

・移住・定住の取り組みとして、平成27年、町会長に空き家調査を依頼

その後不動産屋との交渉や、相談窓口を開設するなどの取り組みを実施。



【意見交換】

地域の資源を生かして活動を活発にするにはどうしたらよいかグループ討議。

1人1分で話してもらおう。

当グループではどの地域も高齢化で悩んでいる。

対策として

- ・地域資源を活用して、地域とのネットワークの設立（情報発信の必要）
- ・後継者を育てる。
- ・産学連携や70歳以上のサロンの設置。
- ・他の地域からの転入の受け入れを図る

等の意見が出された

【まとめ】

○里山自然学校こまつ滝ヶ原

地域資源への切り口がいろんな形で必要

○花咲く湯涌・まちづくりネットワーク推進プロジェクト

地域おこし協力隊の活動が半年延長となっているので、今後どういう風になるか検討していきたい

■国語・音楽「先人の心を後世に残すには」【303講義室】

（発表団体：一般社団法人語り部協会（能美市））

【発表者】

富田静香さん

【ゲスト】

- ・やすきひろこさん（やまと語り部）
- ・K-WISH（ゴスペルクワイア）

【担当コーディネーター】

森山奈美

【サポート役】

國分谷彦、渡辺直英

【参加者】

19名

【音楽の授業】

K-WISHの14名（子供2名）によるゴスペルソング「STORY」人間の美しさ、優しさとポジティブに力強く歌う、ゴスペルソングは聴く人の心に何か芽生えさせてくれました。

森山奈美さんの作詞とゴスペルソングは時代と共に歩き、笑顔と共に次世代へ「伝える」授業で心が和みました。子どもが2名参加してくれたのがうれしい「伝える」財産だ。

【国語の授業】

語り部を通して次世代の子どもたちに、まちにある昔話や民話、伝統芸能など地域文化をわかりやすく、楽しく、魅力的に「伝える」創意工夫を重ねながら、まちの人を巻き込みながら継承を続けると、このまちの文化がわかり、みずみずしい自然環境と歴史に愛着が育ち、このまちが大好きになる。このまちを「伝える」は子どもたちを成長させてくれる。

<国語ー1 やすきひろこさんの大和語りの魅力>

「大和言葉とはなんぞや」と興味を抱き、大和文化・飛鳥文化の調査研究を重ねながら、また大和言葉と音声の研究をしながら、声に出して稽古に明け暮れた日々でしたと語っておりました。

大和時代の文化「絵」を見ているような気がする語りを続けて18年になりました。語りのきっかけは、子どもが大病になり「母親として何ができるか」と思案中に、私にできるのは「大和言葉の語り」だと悟り、取り組み活動して、今に繋がっているとのことでした。

内から外から若者に大和文化と語り部を通してどう「伝える」か、課題だと話されていました。

<国語ー2 富田静香さんの戦争と語りの魅力>

～ほんとうに伝えなければいけないことが伝わっているのだろうか～

「戦争は知らないけど」「戦争で何が起きたのか」、家族や親戚、地域住民の取材を重ねながら「身近な戦争と家族や親戚、地域住民の悲劇」を語り部の活動をNHK金沢から取材を受け放映されました。今回は放映されたDVDを映していただきました。

参加者には「おじちゃんから「戦争で何が起きたのか」聴いておけばよかった・・・」と話される若い世代がいました。

【語り部を通しての授業のまとめ】

後世に伝える役割の形は十人十色あるけど、一人ひとりの大事な「伝える」役目があるはず。
体験談や、家族の語り、地域文化の語りに耳を傾けて聴いているのだろうか・・・と問う意見もありました。

声は人格、声は姿、声は心です。日々「伝える」「聞く」ことの大切さを教えていただいた授業でした。

【対話の時間】

*対話のルール

1. 聞く
2. 意見をしない
3. 違いがあることを認める

*問いかける

1. 相手の気持ちを引き出す問
2. 相手が心を開く問

*問い

1. 何を伝える
2. どうやって伝える
3. 伝え続けるための仕組みとは

あなたが「伝えたいこと」は何ですか。3グループ対話の記事から

- ・今が人生の全てはない
- ・金沢のよいところ
- ・かぶら寿しの作り方など「伝える」対話の芽が出て育った授業になりました。

【「国語で音楽「伝える」課題】

今の子どもに足りないものは「時間・空間・仲間」。学校の部活動に加え、習い事や塾で忙しく、事業に参加してくれる子どもたちを集めるのが難しくなっております。

昔話や民話や地域文化を伝承していくには、子どもたちのために「手間」を惜しまず、真心を込めて「心地よい居場所づくり」に自らの生き方をかけた、大人たちの行動が課題ではないでしょうか。



言葉の力強さ

1人1人の体験や人生 ^{聞くことで}
自分の中にできること何だろう。

本当のこと、大切なことで
伝える事の大切さ、難しさ。

関心をもってもらうには 協力者
相手目線に合わせて
話せる

命のつながりによって、
大切な事は伝えられている。

- ・誰かがせうまいと...
- ・知らないことは恐いこと。
- ・自分から聞こうとする人は できるだけ場の提供、機会提供
- ・気持ちも伝わる... おどおどでも、後からじわじわと...

伝える力を感じた

語りつぐということは難しい事だと
思いますが、とがえたいと欲しいと思いはず
その根本には思いがあると感じました。

歌声にドキッ!!
語りやすさで感動でした

かたり部は文章を覚えてはいいけれど、その地域に
伝わる物語（伝承）とさかして
る保護に読んで（のめりこみ）
あげたり、年配の方には 思いあててもらえたら良いかな
昔の語り部は話しとして

歌も語りも同様な言語。
伝えて伝わるというんですね。

子どもの命の尊さ（母親の思い）
戦争があつたことは少しづつ薄れていくが
語り部といふ伝えていくことの大切さを天に。

はるか昔の人でも戦争時も、確かに
そこで生きていた人たちがいた事を
過去の事ではなく身近に感じられた。

後世に伝える役割は形はいろいろ
あれど、一人一人の大事な役目。

戦争の話も聞き、^{七くつた}祖父から
色々話を聞けばよかった... 思い出した。
今も大切にしていきたい。

- ・関心をもってもらうには、協力者。
- ・合わせて伝える 自分たちのストーリー
（相手目線） 作りが大事。

伝えたいと思った きっかけ
思いがある
伝えつづけることが大切。

物語にすることが大事
耳で聞くことが大切。

伝えるときに、まず「聞き手」がある
ということ。「伝える役目」を自覚した
人が、語り部になるんだな、という
こと。